

コウノトリ但馬空港のあり方懇話会 最終報告＜概要版＞

令和8年9月

1 検討の背景

開港30年を経た但馬空港について、環境変化や地域が直面する課題を踏まえ、今後の地域振興のために果たすべき役割等を検討するため、本懇話会を設置

【構成】 学識者、地元関係者等15名 座長：関西学院大学 上村敏之 教授
【開催期間】 R2.2.6からR8.7.14まで計7回開催

2 コロナ禍を経た環境変化

【航空業界】

- 国内旅客数は回復
- 一方、ビジネス目的の旅客数が回復せず、コストの増大等により航空会社は厳しい経営状況
- ATR42型機の就航空港・機材数が増加

【周辺地域】

- 道路整備により但馬空港へのアクセス性が向上
- 欧米豪等から豊岡市への外国人宿泊者数が急増
- 大学・演劇祭等による新たな移動目的の芽生え
- 神戸空港で国際チャーター便運航開始

- ビジネス目的の占有率：57%(R1)→36%(R6)
〔出典〕旅行・観光消費動向調査(観光庁)
- 主要6社の国内線営業損益：H30を100としR6は-16
〔出典〕国内航空のあり方に関する有識者会議資料
- ATR42型機 機材数：8機(R1)→20機(R7)、
就航空港：17空港(R1)→34空港(R7)
- アクセス道路が北近畿豊岡自動車道但馬空港IC・豊岡出石IC(R6.9開通)と直結
- 豊岡市外国人宿泊人口数
：1,118人(H23)→102,270人(R7)
〔出典〕豊岡観光インフォメーションHP

コウノトリ但馬空港の概要



- 空港の種別：その他の空港
- 設置管理者：兵庫県
- 運営権者：但馬空港ターミナル(株)(TAC)
- 設置場所：兵庫県豊岡市 (JR豊岡駅から直線で約4km)
- 滑走路：1,200m 1本
- 面積：37.9ha
- 開港：平成6年5月18日
- 就航路線：コウノトリ但馬空港～大阪国際空港(伊丹) 日本エアコミューター(株)(JAC) 1日2往復運航

3 整備の経緯と課題

【経緯】

- 高速交通の空白解消を目的に開港

【地域が抱える課題】

- 高い高齢化率、若者の転出など転出超過(社会減)が継続

【公共交通に期待される役割】

- 定時性、高速性が期待され、交流人口の拡大に資する公共交通インフラ

【但馬空港が直面する課題】

- 潜在需要の発掘／就航率が低い／外国人利用が少ない／二次交通の改善／防災機能の向上／設備の老朽化／滑走路端安全区域(RESA)への対応

4 但馬空港のあり方

(1) 今後の但馬空港の役割とあるべき姿

役割

- 高速交通インフラ：乗継利用での全国への利便性／広域ネットワークのハブ／交流人口の拡大
- 交通結節点：飛行機と高速バス、路線バス等との接続／空飛ぶクルマとの連携
- 防災拠点：代替輸送や支援要員受入のための旅客輸送／物資輸送・集積／医療搬送
- 交流拠点等：多目的ホール・空港公園等の施設を活用／イベント開催／市民交流等

あるべき姿

- 人とモノと地域をつなぐ空の玄関口
- 地域の多様なモビリティの結節点
- 地域の安全安心を支える防災拠点
- 地域に開かれた賑わい、ワクワク感を体験できる空港

(2) 取組方策

- 現空港をまずは最大限活用し、現実的な利活用と地道な取組みの積み重ねにより、機能確保と価値向上を図るべき
- その観点で取組方策を「①着実に取り組むこと」「②将来に向けて研究すること」に区分して整理
- なお、取組方策の実施にあたっては、経済性や財務面等を踏まえたより最適な手法を取り入れることが求められる

① 着実に取り組むこと

(ア) 旅客増加の取組み

- 但馬・京丹後地域や全国各地での認知度の向上
- ハブ機能としての役割強化のため、周辺地域とを結ぶ二次交通の利便性向上
- 観光客に加え、ビジネス客を誘引する仕掛けづくり

(イ) 新たな路線展開

- チャーター便運航による地域のPRと実績づくり
- 首都圏や国際線就航空港等との接続への取組み

(ウ) 空港の賑わいづくり

- 空港公園等を活用した集客交流拠点の設置
- 遊覧飛行等の新たな需要創出
- ターミナルビル等の施設の老朽化対応

(エ) 防災拠点としての機能強化

- 北近畿地域の災害対応拠点としての防災機能向上(非常用発電の確保、吊天井対策等)
- 大規模災害時に対応できる空港機能の維持

(オ) 国際的な安全基準への適応

- RESAの国際的な安全基準への適切な対応
- 定期便運航を維持するため、滑走路短縮ではなく用地拡張で実施

(カ) 就航率の向上(現空港の施設改築を伴わないもの)

- 国が導入を進める衛星航法補強システム(SBAS)を活用した進入方式の適用
- 機材繰りの工夫等による運航品質の改善

② 将来に向けて研究すること

(ア) 地域の交通結節点としての活用

- 飛行機や高速バス、路線バス等の多様な交通の結節点としての活用

(イ) 空飛ぶクルマ(eVTOL)の活用

- 北近畿地域における空飛ぶクルマの社会実装に向け、官民連携し、パーティポート、格納庫等の拠点整備

(ウ) 就航率の向上(現空港の施設改築を伴うもの)

- 悪天候時等に効果的な進入灯の整備(整備に当たっては費用や効果を検討)

(エ) 滑走路延長

- 地元期待は大きいですが費用対効果等を十分勘案

5 今後に向けて

今後のあるべき姿の実現に向けて、本報告書が示す取組方策を基に、県、空港運営会社、地元の「但馬空港推進協議会」、京丹後地域等がより一層連携を強め、時代の変化にあわせた空港機能の最大活用を図り、空港を核とした地域の発展と交流人口の拡大に向けた取組みが求められる